

資本論 第1巻

Das Kapital, Band I

カール・マルクス^{*1} 訳：山形浩生^{*2*3}

2004年6月10日

^{*1} ©Public Domain

^{*2} <http://www.post1.com/home/hiyori13/>

^{*3} ©2003 山形浩生 プロジェクト杉田玄白正式参加作品。本翻訳は、この著作権表示を残す限りにおいて、訳者および著者に一切断ることなく（ちなみに、えらきや著者に断ってごらん）、商業利用を含むあらゆる形で自由に利用・複製が認められる。（「この著作権表示を残す」んだから、「禁無断複製」とかいうのはダメだぞ）詳細は <http://www.genpaku.org/> を参照

訳者口上

これはマルクス『資本論』の翻訳だ。ドイツ語を見てはいるけれど、まあ読む速度の問題から英語からの重訳に近いな。他の翻訳と同じで、単に自分の勉強のために訳している。が、一方で代々木や日本のねじくれまくった 経方面公認のニュースピーク翻訳じゃない、政治的な意図のないフラットな翻訳だから*1、変な洗脳や我田引水なしに読みたい人には役にたつんじゃないかな。

もう一つ、訳した理由としては、20 年前に（日本語訳で）読んでよくわからなくて投げ出した最初の部分を今読むと、別にオレの頭が悪かったわけじゃなくて、マルクスがここで悪質な仕込みをやってるからわからないんだ！ というのがよくわかったから。勝手なインチキ前提おいたら前提通りの結果になった、というだけじゃん。 経の人たちって、こんなのがわからないくらい頭悪かったの？ たぶんそんなことはないだろう。でも、高校生のぼくに理解できなかったということは、たぶんあの邦訳がそこをごまかしてるんだと思う。で、それが高校生にもわかるように訳した本があってもいいんじゃない？ というわけ。

翻訳方針は、いつもと同じ。でも、さすがにクルーグマンの文みたいにはいかないけれど。こんな具合だ：

くだらない序文やエンゲルスの解説のたぐいはとばす。 資本論の翻訳はたいがい、英語版への序文、フランス語版への序文、xxxx 年への序文、エンゲルスの序文、娘の序文、共産党の序文、なんとかの序文、と序文が 20 個くらいあって、一向に本論に到達しない。無視。もちろん、そのうち全部終わったら、後から訳したりはするかもね。いつになるやら。

経公式用語は無視する。 経にはいろいろ特殊な用語があるけれど、そういうのは一切無視した。そんなのがほしければ既存の翻訳を読めばいいじゃん。それに、そんなのが必要な人がこんな翻訳見て何してやがる。それにその手の公式用語って変わるんでしょ。やだよ、そんなの調べるなんて。

*1 もちろん政治的な意図がないというのも一つの政治的な意図だ、といわれればそれまでだけど。

というわけだ。全訳、できるかはまあ仕上げをごろうじろ。ぼくはとりあず、まず最初のところだけでも見せて、かつての高校時代の自分のリベンジをしたかったのだけれど、でもしょっぱなからこの調子じゃその後のところもたぶんつまみどころはあるだろう。それが 経方面でどうつままれてごまかされているか、というのも隠居後のイヂワルな調べモノとしてはおもしろいかもね。ぼちぼち行きます。では、余計な口上はこのくらいで、早速読んでもらおうか。

品川にて
山形浩生

目次

訳者口上	i
第 I 部 商品とお金	1
第 1 章 商品	3
1.1 商品の二つの要素：利用価値と価値（価値の中身、価値の量）	3
1.2 商品に体现された労働の二重の性質	8
1.3 価値の形態、または交換価値	12

第1部

商品とお金

第1章

商品

1.1 商品の二つの要素：利用価値と価値（価値の中身、価値の量）

資本主義的な生産様式が広まった社会の富というものは、「商品のものすごい集積」という形で出てくる。個別の商品は、その要素的な形として出てくるわけだ。だからわれわれの検討も、商品の分析から始めよう。

そもそも商品というのは外的な物体で、その性質を通じて何か人間のニーズを満たすものだ。こうしたニーズがどういうものか、たとえばそれが腹から生じるものか頭の中から生じるものかは、どうでもいい。その物体が人のニーズをどういう風に満たすか、つまり直接の生存手段、消費の対象としてそれを満たすのか、それとも間接的に生産の手段としてそのニーズを満たすのかは、これまたどうでもいいことだ。

すべての役に立つモノ、たとえば鉄や紙は、質と量という二つの観点から見るができる。すべての役に立つモノは、多くの性質から成る総体だ。だからそれがどんなふうに関に立つかというのも、いろいろある。こういう役に立ち方の発見、つまりはモノのいろんな使い方の発見というのは、歴史の働きだ。また、こうした役に立つ物体の量を量るための、社会的に認知された計量尺度の発明も歴史の働きだ。商品の計量の仕方がいろいろあるのは、計量されるべき物体の成立が多様だということもあるし、また慣習からくる部分もある。

モノの有用性は、その利用価値を構成する。でもこの有用性というのは、別になにやら勝手に湧いて出るものじゃない。それはその財の物理的な性質によって条件付けられていて、そういう条件と切り離しては存在し得ないものだ。だから利用価値とか、役に立つモノとかいうのは、鉄とか小麦とかダイヤモンドとかいう商品の物理的実体そのものだ。商品が持つこの性質は、その役に立つ性質を利用するのに必要な労働の量とは関係がない。利用価値を検討するときには、われわれは必ず絶対量を検討しているものと想定する。た

例えば、時計が10個とか、リネンが1ヤード*¹とか、鉄が1トンとか。商品の利用価値は、特殊知識の一部門、つまりは商品の商業的な知識のために材料を提供する。利用価値が実現されるのは、利用または消費の中でだけだ。それはその社会的な形態はどうあれ、富の物質的な形態を構成する。ここで検討されるべき社会の形態の中にあつて、それらはまた交換価値を物質的に担うものでもある。

交換価値はまず何よりも、ある種類の利用価値が、ほかの種類の利用価値と交換されるときに定量的な関係、つまり比率として現れてくる。この関係は、時と場所に応じて絶えず変わる。だから交換価値は、なにやら偶発的で、純粹に相対的なものに見える。結果として、内在的価値、つまりはその財と不可分に結びついて、その中に内在しているような交換価値、なんてものは、ことばの矛盾みたいに思える。この点をもっと細かく見てやろう。

ある商品、たとえば小麦1キロは、 x の靴磨きクリームや、 y の絹や、 z の金とかと交換される。つまり、それはありとあらゆる比率で他の商品と交換される。だから小麦というものには、たった一つの交換価値があるんじゃないで、たくさんの交換価値がある。でも x の靴磨きクリームや、 y の絹や、 z の金等々というのは、すべて小麦1キロの交換価値を示している。だから x の靴磨きクリームや、 y の絹や、 z の金というのは、それぞれお互いに交換できる、あるいは同じような量を持っているにちがいない。するとそこからまず、ある商品の適正な交換価値というのは何か同じものを表現しているんだということ、そして二番目に、あるモノの交換価値は、それとはちがった中身のものの「出現形態」という表現様式でないと表現できないんだ、ということがわかる。

じゃあここで二つの商品を例にとろう。たとえば小麦と鉄にしようか。その交換の関係がどうなっているにしても、それは必ず、一定の量の小麦が何らかの量の鉄と同じだ、という等式の形で表現できる。たとえば小麦1キロ = 鉄 x トンという具合。この等式はどういう意味だろう？ それは、同じ量を持った共通の要素がまったく別のモノ二種類、つまり小麦1キロと鉄 x トンの中にある、ということだ。つまりどっちも第三のものに等しい。その第三のもの自体は、小麦でもなければ鉄でもない。だから鉄も小麦も、その交換価値に関する限り、この第三のモノに還元できるはずだ。

単純な幾何学がこれを示してくれる。多角形の総面積を求めて比較するには、まずそれを三角形に切り刻む。それからその三角形が、その目に見える形とはまったくちがった式、つまり「底辺×高さ÷2」に還元される。同じように、商品の交換価値も共通の要素

*¹ 訳注：ここで従来の書は、リンネルが一エレ、というマルクスが使った通りの単位を使うんだけど、これを読む人々のほぼ100パーセントは1エレというのがどのくらいの量なのか、それがそもそも重さなのか長さなのかもご存じない(ぼくも知らない)。そして、それはまったくここでの本質とは関係ない。混乱のもとだ。だからみんなの知っている量に直す。

に還元できて、それぞれの商品が表すその要素の量が多かったり少なかったりする。

この共通の要素は、幾何学的、物理的、化学的等の商品の自然な性質ではあり得ない。こうした性質は、それがその商品を役にたつものにする範囲、つまりは利用価値に変換できる限りでしか検討対象にならない。でも明らかに、商品の交換関係は、まさにそれが利用価値から抽象化されていることが特徴だ。その交換関係の中で、ある商品の利用価値は、別の商品の利用価値とまったく同じだけの価値を持つ（それが適正な量だけあるとすれば）、あるいは、かつてバルボンが言ったように「ある商品は、価値さえ同じなら別の商品とまったく等価だ。同じ価値を持つもの同士にちがいも区別もない。（中略）価格 100 ポンドの鉛や鉄は、価格 100 ポンドの金や銀と同じだけの価値を持つ」

利用価値としての商品は、なによりも質の点でちがっているけれど、交換価値としての商品は、量的にしかちがわず、だから利用価値はまるっきり含んでいない。

ということでもし商品の利用価値を無視すれば、性質は一つしか残らず、それは労働の産物としての性質だ。でも労働の産物でさえ、われわれの手の中で変換されてしまっている。利用価値から抽象化するってことは、それを利用価値たらしめる物質的な構成物や形態からも抽象化するわけだ。それはもはや、テーブルとか家とか毛糸とか、その他役にたつものじゃなくなる。その感覚的な特徴はすべて消される。またそれは、指物師や煉瓦職人や紡績人など、特定の生産的労働の産物ではなくなる。労働の産物の役に立つ性質が消えると、その中に宿った各種労働がどんな風に役に立ったかというのも消える。ひいては、労働の各種具体的な形態が消えることになる。それらはもはや区別がつかず、すべては同じ種類の、抽象的な人間の労働に還元されてしまう*2。

じゃあ労働の産物で何が残ったかを見てやろう。どの場合にも、残っているのは同じお化けじみた客観性だけだ。それは均質な人間労働が集まった量でしかない。つまり、人間の労働力が費やされたものだけけれど、どれがどういう形で費やされたかはまったく関係なくなる。そういういろんなものは、人間の労働力がその生産に使われて、人間の労働が中に蓄積されているということしか物語っていないわけだ。それらすべてに共通する、この（労働という）社会的な中身の結晶こそが価値 財の価値なのだ*3。

これまで見てきたのは、財が交換関係の中にあるときには、その交換価値は利用価値と

*2 訳注：ここの議論で、すでになぜか「労働」だけ特別扱いされていることに注目。ある商品が何でできているか、たとえば紙だとか、プラスチックだとか、鉄だとか、というのは交換価値においては捨象されることになっている。だったら、それが労働の産物である、ということも捨象されているはずなのに、マルクスはここでそれを「労働の産物」と言い続ける。労働価値説という変な議論をひねり出すための伏線がすでにここにあるわけだ。

さらに、ここの部分とその後の部分で、労働であることは捨象されないくせに、どんな労働であるかは捨象されて、無視していいことになってしまうという恣意性にも注目。

*3 訳注：前節のインチキの結果として、労働 = 価値という労働価値説が早速出てきてる。恣意的に労働というのを残すという勝手な前提があるから、恣意的な労働価値説が導かれているだけだ。

はまったく独立したものとして出てくる、ということだ。でもその利用価値を捨象すれば、そのに残る価値はいま定義した通り。したがって、交換関係での共通の要素、あるいは商品の交換価値の中にある共通の要素は、その価値だ。この先、検討を続ければ、価値の必然的な表現様式としての交換価値、あるいは価値の出現形態としての交換価値というものに戻ってくることになる。でもここでは、価値というものの性質をその出現形態と独立して考える必要がある*4。

利用価値、あるいは便利なモノが価値を持つのは、抽象的な人間労働がそこに客体化されている、あるいはそれがそこに物質化されているからだ。では、この価値の量はどうかやって量ればいいたろうか？ それはそのモノに含まれている「価値を作る中身」、つまり労働の量を使えばいい。この労働の量は労働期間によって計測され、そしてその労働時間は、時間とか日とかいった具体的な尺度で測られる。

もし商品の価値が、それを生産するのに使われた労働の量で決まるなら、作った労働者の技能が低くてぐうたらなほうが商品の価値が高くなりそうに思える。そのほうが、同じモノを作るのに時間がたくさんかかるからだ。でも、価値の中身となる労働というのは等価な人間労働、つまり均一な人間労働力の支出だ。社会の総労働力は、商品の世界の価値にあらわれる。でもそれは、ここでは一つの均一な人間労働力のかたまりと見なされる。ただしそれは無数の個別な単位労働力で構成されてはいる。こうした単位労働力のそれぞれは、それが社会的な労働力の平均単位としての特性を持ち、平均単位として機能する限りにおいて、他の単位労働力とまったく同じだ。つまり、その単位労働力は、ある商品を作り出すのに平均的にかかるだけの労働時間 あるいは言い換えると、社会的に必要なだけの労働時間 しか要さない。社会的に必要な労働時間というのは、その社会において通常の生産条件のもと、その社会で通例となっている平均的な技能水準と労働の集約度のもとでそのモノを作り出すに必要な労働時間のことだ*5。イギリスへの動力織機の導入は、一定量の毛糸を織り生地に変えるための必要労働を半減させただろう。実際には、毛糸を生地にするためにイギリスの手動織機の労働者が必要とする労働時間は前と変わらない。でもかれの労働一時間の産物は、社会的な労働の30分にしかならないので、その結果としてその労働時間はそれまでの半分の価値しかなくなってしまったわけだ。

つまりどんな財でも、その価値の量を絶対的に決めるのは、社会的に必要な労働の量、あるいはその生産に社会的に必要なとされる労働時間だ。個別の財は、ここではその種類の財の平均的なサンプルとしての意味しかない。同じ量の労働を含む商品、あるいは同じ時

*4 訳注：いつの間にか、利用価値、交換価値以外の第三の価値が出てきているので表現がとても混乱しているけれど、その第三の価値というのは上のインチキで出てきた労働価値、なのだ。

*5 訳注：ここでの「平均」とか「通例」という物言いで、マルクスは市場というのをなあなあでごまかそうとしているのに注目。

間で生産できる商品は、したがって同じ価値を持つ。ある商品の価値が、その他あらゆる商品の価値に対して持っている関係というのは、前者を作るのに必要な労働時間と、後者を作るのに必要な労働時間との関係と同じだ。「交換価値として見れば、すべての商品は単にそこに業種された労働時間の絶対量でしかない」。

だから、もし作るのに必要な労働時間が一定のままなら、その財の価値も一定のままだ。でも後者は、労働の生産性がちょっと変わればすぐに変動する。労働生産性は、いろんな状況に応じて決まる。いろいろあるけれど、たとえば労働の平均技能水準とか、科学やその技術的応用の発達水準とか、生産プロセスの社会的な組織形態とか、生産手段の量やその有効性、自然環境の条件なんかもよる。たとえば、豊作期には小麦 8 ブッシェル作れる労働で、凶作期には 4 ブッシェルしか生産できない。同じだけの労働をかけても、豊かな鉱山ではやせた鉱山よりもたくさんの金属が得られる。ダイヤモンドは地表面ではとても珍しいので、その発見には平均すると労働時間がいっぱいかかる。結果として、少量のダイヤでもたくさんの労働が表現されるわけだ。ジェイコブは、黄金に対してその十分な価値だけ支払われたことがあるだろうかと問うている。ダイヤモンドならなおさらだ。エシュウエーゲによれば、1823 年までの 80 年間でブラジルのダイヤ鉱山から生産されたダイヤの量は、同じブラジルの砂糖・コーヒー農場の平均生産高一年半分の価格にも相当しなかったけれど、でもダイヤモンドのほうがずっと多くの労働を表現しているので、その価値もずっと大きい。鉱山が豊かなら、同じだけの労働を表すダイヤモンドの量も増えるから、その価値は下がる。もしあまり労働をかけずに炭素をダイヤに変換するのに成功したら、ダイヤの価値は煉瓦以下になるかもしれない。一般に、労働生産性が高ければ、モノを作るのに必要な労働時間も少なくなって、そのモノに結晶した労働量も減り、その価値も減る。逆に、労働生産性が低ければ、そのモノの生産に必要な労働時間も増えて、その価値も上がる。だから商品の価値は、その商品の中に具現化された労働の量と直接的に比例して、労働生産性とは反比例する。（これで価値の中身がわかった。それは労働だ。その量の尺度もわかった。それは労働時間だ。価値を交換価値に仕立てる形態は、これから分析する。でもその前に、ここまで見つけた特徴をもうちょっと広く発展させる必要がある）。

あるものは、価値にならなくても利用価値になれる。これは、そのモノの人間にとっての効用が労働を媒介としていない時にはすべて生じる。空気、処女地、自然の野原、原生林等々はこの区分におさまる。あと、モノは役にたって人間の労働の産物であっても、商品ではないこともある。商品を生産するには、人は単に利用価値を生み出すだけでなく、他人にとっての利用価値、社会的な利用価値を生み出す必要がある（そして単に他人にとっての利用価値、というのでもダメだ。中世のお百姓さんは、封建地主のために小麦で

地代を生産し、神父のために穀物で十分の一税を支払った。でもこの小麦による地代も、小麦による十分の一税も、他人のために生産されているけれどそれだけじゃ商品になっていない。商品になるには、そのモノが利用価値を持つだけか、何か交換の媒体を通じて移転される必要がある。最後に、役に立つモノになれないものは、価値をもてない。そのものが役に立たなければ、そこに含まれた労働だって役に立たない。その労働は労働の数に入らず、だから何の価値も生み出さない*6。

1.2 商品に体现された労働の二重の性質

最初、商品は利用価値と交換価値の両方を持つ、二重の性質をもったモノとして登場した。後で労働もまた二重の性質を持つことがわかった。それが価値として表現される限り、それはもう利用価値を作るものとしての性質とは別の性質を持つようになる。これを指摘して、商品に含まれた労働の二重の性質を批判的に検討したのはわたしが最初だ。この部分は経済の理解にとってとても大事なので、もうちょっと説明が必要だ。

二つの商品を例にとろう。上着とリネン 10 ヤードにしようか。そして前者の価値は、後者の価値の二倍ってことにしよう。つまり リネン 10 ヤード = W なら、上着 = $2W$ ということになる。

上着は、あるニーズを満たすような利用価値だ。それが存在するようになるには、特定の生産活動が必要とされる。この活動は、その目的、活動のあり方、対象、手段と結果で決まってくる。われわれは、産物の利用価値によって効用があらわされる労働、つまりその産物が利用価値だということ効用が決まる労働について、手短かに「役に立つ労働」という表現を使おう。これと関連して、われわれは労働の役に立つ効果しか考えない。

上着とリネンは、質的に異なる利用価値だし、それが存在するに至るまでの労働の形態も質的にちがっている。上着は仕立て作業だし、リネンなら布織りになる。利用価値が質的にちがわず、つまり質的に異なる役にたつ労働の産物でないなら、両者が商品として対峙することはまったく不可能になる。上着は上着と交換できないし、ある利用価値は、同じ利用価値とは交換できない。

ありとあらゆるちがった利用価値または物理的な商品が存在するのは、役に立つ労働が同じくらいありとあらゆる形で存在するということを反映している。役に立つ労働は、Gattung, Art, Familie, Unterart、多様性の点でちがっている。要するに、これは社会的な分業だ。この分業は、商品生産の必要条件だけれど、その逆は成り立たない。商品の生産は、社会的な分業を必要とはしない。労働は原始的なインディアンのコミュニティでも社会的に分けられているけれど、でもその産物はそのせいで商品になったりはしない。あ

*6 訳注：じゃあさっきのダイヤは？

るいは、もっと身近な例を挙げると、労働はいろんな口上で体系的に分割されているけれど、でも労働者たちはその個々の生産物を交換することでこの分業を実現するわけじゃない。孤立して実施される、相互に独立した労働行為の産物だけが、商品となって相互に対峙できる。

じゃあまとめてみよう：すべての商品の利用価値は、役に立つ労働、つまり明確な目的を持った明確な生産行為を含んでいる。利用価値は、そこに含まれる役に立つ労働がそれぞれ質的にちがう場合でないと、商品として相互に対峙できない。生産物がふつうは商品という形を取る社会、つまり商品生産者の社会では、個々の生産者が独立して個別に行う役に立つ労働の形の質的な差は複雑な体系を作り上げ、これが社会的な分業となる。

それと、その上着を着るのが仕立て屋さんかそのお客さんか、というのはどうでもいいことだ。どっちの場合にも、上着は利用価値として機能している。それと仕立てが特殊な商売、つまりは社会的分業の独立した一部門となっても、上着とそれをつくる労働との関係そのものは変わらない。人は何千年も、衣服が必要だという衝動で服を作って着たけれど、だれ一人として仕立て屋になったりはしなかった。でも上着やリネンや、その他もともと自然が提供していない物質的な富のすべての要素は、常にその目的に応じた個別の生産活動が仲立ちする必要があった。そういう生産活動は、ある自然の材料を特定の人間のニーズにあてはめる活動だ。つまり労働、それも利用価値を作るものとしての労働、役に立つ労働としての労働は、社会のあらゆる形態とは独立して存在する人間存在の条件だ。それは人間と自然との代謝を仲立ちする、永遠の自然ニーズであり、だからそれは人間の生そのものだ。

上着やリネンといった利用価値、つまり商品の物理的実体は、自然が提供する材質、そして労働という二つの要素の組み合わせだ。上着やリネンなんかの中に含まれた、いろんな役に立つ労働の総量を差し引けば、必ず残るのが物質的な下層部だ。この下層部は人間が手出しせずとも自然が提供する。人が生産をするときは、自然がやるのと同じようにしかできない。つまり、材料の形を変えることしかできない。さらに、この改変作業でも、人は絶えず自然の力に助けられている。だから労働は物質的な富、つまりそれが生み出す利用価値の唯一の源ではない。ウィリアム・ペティも言ってるように、労働は物質的な富の父親であり、地球がその母親なのだ。

じゃあ今度は、効用をもたらすモノとしての商品から、商品の価値に話を進めよう。

上着はリネンの二倍の価値を持つと仮定した。でもこれはただの量的な差なので、ここでは問題にならない。だからもし上着の価値が、リネン 10 ヤードの二倍ならば、リネン 20 ヤードは上着と同じ価値を持つ、ということだけ頭に入れておこう。価値という意味では上着もリネンも同じ中身を持っている。それは均質な労働の客観的な表現だ。でも、

ある社会状況では、同じ人が服を作るのと布を織るのを交互に行う。この場合、二種類のちがった労働の様式は、同じ個人の労働の変形でしかなくて、ちがう個人のそれぞれに固有な固定関数じゃない。ちょうど我々が仕立て屋の今日作る上着と、明日かれが作るズボンとでは、かれが自分個人の労働を変えればいいだけだということと同じだ。さらに、われわれの資本主義社会では、一定割合の労働が一部は仕立て作業、一部は布織りという形で、労働需要の向きの変化に応じて交互に供給されることがわかる。この労働の種類の変化は、摩擦なしには起きないけれど、でも起こらざるを得ない。

生産活動の決定的な質を無視し、つまりは労働の役に立つ性質を無視すれば、残るのは人間の労働力として支出されるという性質だ。仕立て作業と布織り作業は、質的にはちがった生産活動だけれど、人間の頭脳、筋肉、神経、手等々の生産的な支出となるので、この意味でどちらも人間労働だ。どちらも単に、人間の労働力が支出される形がちがうだけだ。もちろん人間の労働力は、それがあれこれの形で支出できる前に、ある水準の成長度を達成していることが必要だ。でも商品の価値は単純明快に人間の労働力、つまり人間労働一般の支出を表しているのだ。そして市民社会において、將軍や銀行家が大きな役割を果たすがそうした人個人はごくつまらない部分しか果たさないのと同様に、人間労働についても同じことが言える。これは単純な労働力の支出であって、つまりはすべての通常人が、平均として、何ら特殊化されずに肉体器官の中に持っている労働力なのだ。単純な平均的労働というのは、確かに国ごとにもちがうし文化的なエポックごとにもちがうけれど、ある特定の社会を見れば、それは固定されている。もっと複雑な労働は、単純労働が集約化されたもの、あるいは何倍かされたものとしてのみ意味を持ち、だから少量の複雑な労働は、大量の単純労働に等しいと考えられるわけだ。経験から見て、こうした還元は絶えず行われている。ある商品はきわめて複雑な労働の成果かもしれないけれど、その価値を通して、それは単純な労働の産物と等しいものとされ、結局それは単純労働のある量を表しているだけ、ということになる。ちがった種類の各種労働が、計測単位としての単純労働に還元されるとき比率は、生産者の背後で動いている社会プロセスによって確立される。だからそうした比率は、生産者に見れば、伝統によって決まったものとして伝えられたように見える。話を単純にするために、この先はあらゆる労働力の形を直接的に単純な労働力として見ることにしよう。こうすることで、われわれは単にいちいち還元する手間を省いているだけだ。

上着とリネンを価値として見るとき、両者のちがった利用価値を捨象するのと同じように、そうした価値があらわす労働の場合、われわれはその役に立つ形態、つまり仕立て作業と布織り作業の差を無視する。上着やリネンという利用価値は、一方でははっきりした目的のある生産活動と、一方では布や糸とが組み合わさったものだ。でも上着やリネンの

価値は、単に均質な労働が凝集した量でしかない。同じように、こうした価値に含まれる労働は、その布や毛糸に対する生産関係のために勘定されるわけではなく、単に人間労働力の支出だから勘定されるだけだ。仕立て作業と布織り作業が、上着とリネンという利用価値の形成要素になっているのは、それがまさにこの二種類の労働がちがった性質を持つからだ。でもいまあげた二種類の品の価値の中身を仕立て作業と布織り作業が形成するのは、それがどちらも人間労働だという性質を持っている限りにおいての話でしかない。

でも上着やリネンは、単に一般的な価値ではなくて、はっきりした量を持った価値だし、仮定によれば上着はリネン 10 ヤードの二倍の価値を持つ。なぜ価値にちがいがあるんだろうか？ それはリネンには上着の半分しか労働が含まれず、だから上着を作るために支出が必要な労働力は、リネン 10 ヤードを作るのに支出が必要な労働力の二倍必要だからだ。

ということは、利用価値から見れば商品に含まれた労働は質的にしか問題にならず、価値から見るとそれは、純粹単純な人間労働に還元されてしまえば定量的にしか問題にならない、ということだ。前者ではそれは、「どうやって」使われた「どんな」労働か、という話で、後者では「どのくらい」つまり労働の時間的な期間の話になる。商品の価値の量はそこに体现させた労働量を表すものでしかないから、すべての商品は、しかるべき量さえ集めれば、すべて同じ価値を持つということになる。

たとえば上着を作るのに必要な、各種のちがった役に立つ労働の生産性が変わらなければ、生産された上着の総価値は、生産された上着の量とともに増大する。上着一着が x 日の労働を表すなら、上着二着は $2x$ 日の労働を表す等々、というわけ。でもこんどは、上着の生産に必要な労働期間が倍になったか半分になったと想定しよう。倍増の場合、上着一着はそれまでの上着二着と同じ価値を持つ。半分になったら、上着二着はかつての一着分の価値しかない。でもどちらの場合にも、上着の提供するサービスは同じで、そこに含まれる役に立つ労働の品質は変わらないままだ。でも、変わったものが一つだけある。それはその品物を生産するために支出された労働の量が変わったことだ。

利用価値の量の増大は、それ自体で物質的な富の増大となる。上着二着は、二人の人間の服となれるが、一着なら一人しか着れない等々。それでも、物質的な富の量の増大は、その価値の量が同時に低下することに対応する場合もある。この矛盾するような動きは、労働の二重の性質から生じる。もちろん「生産性」というとき、それは具体的で役に立つ労働の生産性をいつも意味している。でも実際には、これはある一定時間内で、一定の目的に向けられた生産活動が持つ有効性を決めているにすぎない。だから役に立つ労働は、生産性が上がったたり下がったりするのに正比例して、大なり小なり産物のたっぶりした源になるわけだ。これに対して、生産性が変わっても、価値の中に現れている労働そのもの

には何の影響もない。生産性というのは、具体的で役に立つ形の労働が持つ属性なので、労働を具体的で役に立つ形から抽象化してしまったら、当然ながらすぐに労働とは何の関係もなくなってしまう。だから同じ労働が同じだけの時間実施されれば、生産性がどう変わろうと、常に同じ価値の量を生み出す。でも生産性が変われば、同じ時間で同じ労働が生み出す利用価値の量はちがってくる。生産性があがれば、生産される利用価値の量は増えるし、生産性が下がれば、利用価値の量も減る。だから、労働の成果を増やし、つまりはそこから生産される利用価値の量を増やすような生産性の変化は、それが同じ利用価値を生産するのに必要な労働時間総量を減らすなら、増えた総量の価値の低下を同時にもたらず。その逆もまた成り立つ。

一方では、すべての労働は生理的な意味での人間労働力の支出であり、商品の価値を形成するのは、それが等しい、あるいは抽象化された性質を持つ人間労働だ。その一方で、すべての労働は特定の形ではっきりした目的を持った人間労働力の支出であり、利用価値を生み出すのは、それ具体的で役に立つ労働だという性質なのだ。

1.3 価値の形態、または交換価値

商品は、鉄とかリネンとか小麦とかいった利用価値や物質的な財として登場する。これはその商品の本来的で自然な形だ。でも、それが商品になるのは単にそれが二重の性質を持つから、つまりそれが効用を持つ物体であると同時に価値を担う存在だからだ。だから、それが商品として登場するのは、あるいは商品という形態をとるのは、それが二重の形態、つまり自然の形態と価値の形態の両方を取る限りでの話だ。

価値としての商品の客観性は、『ヘンリー四世』のクイックリー夫人とはまったくちがって「人はどこからそれをモノにすべきかわからない」。価値としての商品の客観性には、物質は原子一つたりとも入ってこない。この点でそれは、物理的な物体としての商品の、粗野なまでに官能的な客観性とは正反対だ。ある商品をあれこれ好きなようにひねくりまわすことはできる。でもそれを何か価値あるものとして把握するのは不可能だ。でも、商品が商品が価値としての客観的性格を持つのは、それがすべて同じ社会的な中身、つまり人間の労働の表現である限りなんだ、ということは忘れないようにしよう。そしてだから、その価値としての客観的な性格も純粹に社会的なんだ、ということも忘れてはいけない。ここから自明のこととして出てくるのは、価値としての客観的特徴は、商品同士の社会関係の中にしか出てこない、ということだ。実はわれわれが交換価値（または商品の交換関係）から出発したのは、その中に隠されている価値を追いかけるためだ。いまやわれわれは、価値の現れ方のこの形態に戻らなきゃいけない。

だれでも、他の何は知らなくとも、商品というのが共通の価値形態を持っていることは

知っている。それはその利用価値の自然形態の雑多さに比べると、実に驚くほど対照的だ。でもここで、われわれはブルジョワ経済学が決してやったことのない作業をする必要がある。つまり、このお金という形態の起源を示す必要がある。つまり、商品の価値関係に含まれた価値の表現の発達を、その一番簡単でほとんど感じ取れないほどの概略から、魅惑のおかねという形態にいたるまでたどる必要がある。これせすめば、お金の謎はすぐに消え去る。

一番簡単な価値関係は、当然ながらある商品と、何か別種の商品との関係だ（どの商品でも構わない）。だから二種類の商品の価値同士が持っている関係を使えば、ある商品の価値を一番簡単に表現できる。

1.3.1 単純で孤立した、または突発的な価値の形態

x の商品 $A = y$ の商品 B 、または x の商品 A は y の商品 B の価値を持つ。

（リネン 20 ヤード = 上着 1 着、あるいはリネン 20 ヤードは上着一着の価値を持つ）

(1) 価値の表現の両極：相対的な価値の形態と、等価な形態

価値の形態の謎はすべて、この単純な形態に隠されている。だからわれわれにとって本当にむずかしいのは、それを分析することだ。

ここで二種類のちがった商品（ここでの例は、リネンと上着）は、それぞれ明らかにちがった働きをする。リネンは上着の中にその価値を表現する。上着は、その価値が表現される材料として機能する。最初の商品は能動的な役割を果たし、二番目は受動的だ。最初の商品の価値は相対価値として表現されている。つまり商品というのは、価値の相対手的形態だ。二番目の商品は等価性の機能を果たしている。つまり、それは等価な形態になっている。

価値の相対的な形態と、等価な形態は、不可分な二つの瞬間で、それはお互いに所属しあい、お互いに条件付けあっている。でも同時に、両者はお互いに相容れないか、対立する両極、つまり価値の表現の両極となる。それは常に、その表現によってお互いに関係を持たされた、ちがう商品の間で分割されている。たとえばわたしは、リネンの価値をリネンでは表現できない。リネン 20 ヤード = リネン 20 ヤード、というのは価値の表現になってない。この等式があらわしているのは、むしろ正反対のことだ。リネン 20 ヤードはリネン 20 ヤードでしかないということで、役に立つものとしてとらえたリネンの絶対的な量を表している。だからリネンの価値は相対的にしか表現できない。つまり他の商品によってしか表現できない。リネンの価値の相対的な形態は、何か別の商品がそれに等価な形態で対峙するということを前提にしている。一方、その等価として出てくる別の商品

のほうは、同時に価値の相対的な形態はとれない。価値が表現されているのは、その後者の商品じゃない。それは単に、最初の商品の価値をあらわすための材料を提供しているだけだ。

もちろん、リネン 20 ヤード = 上着一着、あるいは 20 ヤードのリネンは上着一着の価値を持つ、というのは、その逆も含んでいる。上着一着 = リネン 20 ヤード、あるいは上着一着はリネン 20 ヤードの価値を持つ。でもこの場合には、上着の価値を相対的にあらわすために、等式をひっくり返さなくてはならない。そしてそれをやったら、今度は等価物になるのは上着ではなくリネンだ。同じ商品は同じ価値の表現の中で、同時に両方の形態を取ることはできない。この二つの形態は、むしろおたがいを両極端の反対物として排除しあう。

商品が相対的な形をとるか、それともその反対の、等価の形を取るかは、その価値の表現における実際の位置に完全に依存する。つまり、それが価値を表現されている商品なのか、価値を表現するために使われている商品なのかによるわけだ。

(2) 価値の相対的な形態

(i) 価値の相対的な形態の内容

商品の価値の単純な表現が、二つの商品の価値関係の中にどういうふうに隠されているかを見つけ出すには、われわれはまず、価値関係をその量的な面とまったく独立に検討しなくてはならない。普通のやり方はこの正反対になる。つまり他のみんなは、価値関係の中に二種類の商品の絶対量が等しくなるような比率以外の何も見ようとしない。すさまじく多種多様なものが量的に比べられるようになるのは、それが同じ単位に還元されたときだけだ、ということは見過ごされる。両者が共通の尺度を持ち、同じ基準ではかれる量となるのは、両者が同じ単位の表現となったときだけだ。

リネン 20 ヤード = 上着 1 着 だろうが、リネン 20 ヤード = 上着 20 着 だろうが、リネン 20 ヤード = 上着 x 着 だろうが、つまりある量のリネンが少数の上着の価値を持つとたくさんの上着の価値を持つと、その比率はどうあれそこでは必ず、リネンと上着は価値の量として、同じ単位の表現で、同じ性質を持つものだという含みがある。リネン = 上着 というのが等式の基本にあるわけだ。

でもこの質的に等しいとされた商品は、同じ役割を演じているわけじゃない。表現されているのは、リネンの価値だけだ。どうやって？ コートに対して、その「等価物」または「交換できるもの」として関係を持つことで。この関係の中だと、上着は価値の存在する形として、価値を物質的に内在させたものとして意味を持つ。というのも、そういうふうにしかそれはリネンと等しいものになれないからだ。同じように、酪酸は蟻酸塩プロピルとはちがう物質だ。でもどちらも同じ化学物質、炭素 (C)、水素 (H)、酸素 (O) で

きている。さらに、これらの物質はどちらの場合にも同じ比率で結合している。つまり $C_4H_8O_2$ だ。じゃあ、酪酸と蟻酸塩プロピルとを等号で結ぶなら、まず蟻酸塩プロピルは $C_4H_8O_2$ の存在形態の一つとしてしか意味をもたない。そして第二に、そこから酪酸も $C_4H_8O_2$ でできていると想定される。だから酪酸と蟻酸塩プロピルとを等号で結ぶことで、その人は両者の物理的な構成ではなく化学的な組成を表現していることになる。^{*7}

もし価値としての商品が単に人間労働の凝集した量でしかないと言うなら、われわれの分析は確かにそれを抽象的な価値の水準にまで還元するけれど、でもそこに自然形態からはっきり区別される形態を与えたわけじゃない。それはやっぱりある商品と別の商品との価値関係の中にある。最初の商品の価値の特性が、第二の商品に対する関係を通じて表れてくるわけだ。

たとえば、価値あるものとしての上着をリネンと等号で結ぶことで、われわれは上着の中に埋め込まれた労働を、リネンの中に埋め込まれた労働と等しいとしているわけだ。さて上着を作る仕立ては、具体的な作業としてはリネンを作る布織りとは確かにちがったものだ。でも仕立てを布織りと等号で結ぶことは、実は前者をこの二種類の労働で本当に等しいものに還元する。つまりどちらも人間の労働だという共通の特徴に還元しているわけだ。これは布織りというのもまた、それが価値を織る限りにおいては仕立て作業と何のちがいもなく、つまりは抽象的な人間の労働とも何もちがわない、と言うのをまわりくどく言っているだけだ。価値を作り出す労働の具体的な性質を目に見えるようにするのは、ちがった各種の商品同士の等価性の表現だけだ。その表現は各種の商品に埋め込まれた各種の労働を、人間労働一般であるという共通の性質に還元することで実現されている。

でも、リネンの価値を構成する労働の具体的な性質を表現するだけじゃ十分じゃない。流動状態の人間労働力、あるいは人間労働は、価値は作るけれどそれ自体は価値ではない。それは客観的な形で凝集状態となって初めて価値となる。人間労働の凝集した固まり医としてのリネンの価値は、「客観性」としてのみ表現できる。これは物質的にはリネンそのものとはちがうけれど、でもリネンやその他あらゆる商品に共通なものだ。問題はすでに解決された。

リネンとの価値関係にあるとき、上着は定性的にはリネンと同じものとして意味を持ち、同じ性質のものとして意味を持つ。それは、上着に価値があるからだ。だから上着はこの場合には、内部に価値が表現されているもの、あるいはその形ある自然な形態の中に価値を表象するものだ。でも上着そのもの、上着という商品の物理的な側面は、純粹に利

^{*7} 訳注：じゃありネンと上着の場合だって同じ量の繊維でできているといった意味になるだろうに。要するに、モノにはいろんな性質があって、だから等号で結んだときそれが何をもち「等しい」としているかはその式を書いた人次第なのだ。恣意的に考えた「価値」を前提の段階でマルクスが負わせたからこそ、その後の価値形態論が引き出されるだけ。ここもまた、前提がめぐって結論になってるだけだ。

用価値だ。利用価値としての上着は、お目にかかる最初のリネンと同じく、価値は表現していない。これが証明しているのは、リネンとの価値関係の中で、上着はその価値関係の外で意味しているものよりも多くを表現しているということではない。ちょうど一部の人が、金モール付の制服におさまった時のほうが、そうでない場合よりも重要人物になるのと同じことだ。

上着の生産の中で、人間の労働力は、仕立てという形で実際に支出された。つまり人間労働は上着に蓄積された。この観点からすると、上着は「価値を担うもの」だけれど、上着がボロボロにむきだしになったときでさえこの「価値を担うもの」としての性質は外には見えてこない。リネンとの価値関係の中で、上着はこの側面でしか意味を持たない。つまり宿された価値として、価値の実体としてのみ意味を持つ。上着はご立派な外見ではあるけれど、リネンはそこにすばらしい仲間としての魂、価値という魂を見て取るわけだ。それでも、上着はリネンに対して価値を提示するとき、同時に上着という形を取らなければならない。たとえばある個人 A が別の個人 B に対して「陛下」になるには、B の目において陛下が A という人物の肉体的な形を取るしかないし、さらには、「臣民の父」が新たに出てくるたびに顔の特徴や髪やその他多くのものを変えなければならない。

だから上着がリネンの等価物になるような価値関係では、上着の形態は価値の形態と見られる。リネンという商品の価値は、つまりは上着という商品の物理的実体によって表現される。片方の価値はもう一つの利用価値によって表現されることになる。利用価値としてはリネンは上着とは明らかにちがっている。価値としては、それは上着と同じで、だから上着のように見える。だからリネンは自然の形態とはちがった価値形態を得ることになる。リネンの価値としての存在は、その上着との等価性に表現されている。ちょうどキリスト教徒のヒツジ的な性質が、その神の子ヒツジと似ているところに示されているように。

では、リネンが上着という別の商品との関係の中に入ったとたんに、商品の価値についての分析でこれまでわかったことが全部、リネンそのものの中に反復されるということがわかったわけだ。ただしその思考は、それ自身だけがわかることは、商品のことばでしか明かされない。それは上着が等価物として意味づけられる限りにおいて、リネンと同じだけの価値を持つ労働で構成されるということを語り、それを通じて労働が人間労働だという抽象的な性質だけからその価値を作り出す、と語る。価値としての崇高な客観性が、その物体としての硬く糊付けされた存在とはちがっていると告げることで、それは価値が上着という外見を持っていて、したがってリネンそのものが価値を持つ物体である限り、リネンとコートはうり二つだ、と物語っている。ちなみに、商品の言語もヘブライ語以外に山ほどの、そこそこ正しい方言を持っている。たとえばドイツ語の Wertsein（価値を持

つ)は、ロマンス語族の動詞 *valere, valer, valoir* よりも自然なかたちで、商品 B を商品 A と等しいものと見ることが、商品 A に属する価値の表現だと言うことを示してくれる。

Paris vaut bien une messe!

だから価値関係という手段を通じて、商品 B の自然形態は、商品 A の価値形態となる*⁸。つまり商品 B の物理的な実体が商品 A の価値の鏡となるわけだ。つまり商品 A は、商品 B と価値対象（人間労働の実体化）としての関係に入ること、利用価値 B を、それ自身の価値表現をするための材料にする。商品 A の価値は、つまりは商品 B の利用価値で表現され、相対価値という形態を持つ。

(ii) 価値の相対的な形態を定量的に決める

価値が表現される商品はすべて、ある量を持った役に立つ物体だ。たとえば小麦 15 ブッシェルとか、コーヒー 100 ポンドとか。どんな商品であれ、ある量には人間の労働が絶対量だけ含まれている。だから価値の形態は、一般的な価値を表現するだけでなく、定量的に決められる価値、つまり価値の量を示さなきゃいけない。商品 A と商品 B との価値関係、たとえばリネンの上着に対する価値関係では、上着という商品の種類がリネンと定性的に、そうした価値を持つ物体として等しいものとされるだけでなく、価値を持つ物体または等価物の絶対量（たとえば上着一着）がリネンのある絶対量（たとえば 20 ヤードのリネン）と等しいとされる。リネン 20 ヤード = 上着 1 着、あるいは 20 ヤードのリネンは上着一着の価値を持つ、というのは上着 1 着の中に、価値を持つ中身が 20 ヤードのリネンの中にある価値を持つ中身とまったく同じ量だけ存在しているのだ、ということを含意している。だからそれは、ここで提示された二つの商品の量は、同じだけの労働量または同じだけの労働時間がかかっている、ということの意味している。でもリネン 20 ヤードまたは上着 1 着を作るのに必要な労働時間は、織り手や仕立屋の生産性がちょっと変わると変動する。こうした変化が価値の量の相対的な表現にどう影響するかを、これからもっと詳細に検討しなければならない。

1. 上着の価値が一定だとして、リネンの価値が変わると考えよう。リネンを作るのに必要な労働時間が倍増したら（たとえば綿花を作る土の肥沃さがどんどん下がったりして）、リネンの価値もまた倍増する。リネン 20 ヤード = 上着 1 着ではなく、こんどはリネン 20 ヤード = 上着 2 着になるだろう。というのも、上着 1 着はリネン 20 ヤードに比べて半分の労働時間しか含んでいないからだ。一方、リネンを作るのに必要な労働時間が半減したら（たとえば織機の改良など）、リネンの価値

*⁸ 訳注：訳しててうんざりするんだが、マルクスはここで同じことを何度も何度も、ちょっと語順を変えたりしてどくどく言い直しているけれど、何も新しいことを言っていないのだ。何かちがいがあるんだらうと思ひこんでそれを読み取ろうとすると、深読みして重箱の隅つつきに墮するはめになるのでご注意を。

は半分になる。これにともなって、さっきの等式は今や リネン 20 ヤード = 上着 $\frac{1}{2}$ 着 となる。商品 A の相対価値、つまり商品 B で表されたその価値は、B の価値が一定なら、A の価値と比例して変わる*⁹。

2. リネンの価値が一定だとして、上着の価値の方が変わるとしよう。この状況で上着を作るのに必要な労働時間が倍増したら（たとえば羊毛の質が悪いとか）、リネン 20 ヤード = 上着 1 着 ではなく、リネン 20 ヤード = 上着 $\frac{1}{2}$ 着 となる。もし逆に上着の価値が半分に下がったら、リネン 20 ヤード = 上着 2 着 となる。つまり商品 A の価値が一定なら、商品 B で表現されたその相対価値は B の価値の変化と反比例して下がる。

いまの 1 と 2 で検討した各種のケースを比べてみると、相対価値が同じ規模で変化しても、その原因は正反対の場合がある、ということがわかる。つまり リネン 20 ヤード = 上着 1 着 が リネン 20 ヤード = 上着 2 着 になるのは、リネンの価値が倍増したからかもしれないし、上着の価値が半減したからかもしれない。リネン 20 ヤード = 上着 $\frac{1}{2}$ 着 となるのは、リネンの価値が下がったからかもしれないし、上着の価値が上がったからかもしれない。

3. リネンの生産に必要な労働の量と、コートを作るのに必要な労働の量が、同時に同じ方向に同じ割合だけ動いたとしよう。この場合、それぞれの価値がどう変わろうとも、前と同じように リネン 20 ヤード = 上着 1 着 となる。両者の価値の変化がわかるのは、価値が変わらなかった第三の商品と比べたときだけだ。もしすべての商品の価値が同時に同じ割合で上がったり下がったりすれば、その相対価値はまったく変わらない。その実際の価値の変化は、同じ労働時間内で生産される商品の量の増減にあらわれる。
4. リネンと上着のそれぞれに必要な労働時間、つまりはその価値は、同時に同じ方向に変化する場合でも、その程度がちがうかもしれないし、または変化の方向がちがったりすることもある。この種の組み合わせとして可能なものがそれぞれ商品の相対価値に与える影響は、単純に上の 1, 2, 3 のケースを適用すればいいだけだ。

だから価値の量の実際の変化は、その相対的な表現（または言い換えれば相対価値の大きさ）に文句なしに表れるわけじゃないし、もれなく表現されるわけでもない。商品の相対価値は、その価値が一定でも変化するかもしれない。価値が変化しても、相対価値は一定のままかもしれない。そして価値の大きさの同時的な変化と、その変化の大きさの相対

*⁹ 訳注：こんなのを「分析」と称して悦にいつてるのは恥ずかしいんだけど。くどくど説明してる分、かえってわかりにくくなってるんだけど、A の価値が倍になったら、他の商品との相対関係で表現しても A の価値は倍になったことになり、と云ってるだけだ。

的な表現とは、あらゆる点でまったく対応するものではない*10。

(iii) 等価な形態

商品 A (リネン) は、その価値を別種の商品 B (上着) の利用価値で表現することで、後者に独特の価値形態、つまり等価物という価値形態を負わせるということを見てきた。リネンという商品は、その価値としての存在を示すのに、上着がリネンと等しいモノと見なせるという事実を使う。そのときその上着は、それ自身の物理的な形態とちがった価値形態を取るわけじゃないのに。上着はそのままリネンと交換可能だ。このようにしてリネンは実際に、価値としての自分の存在を表現する。だから商品の等価形態っていうのは、それが他の商品と直接交換可能な形態だ。

もしある商品、たとえば上着が、他の商品 (リネン) の等価物としての役目を果たし、つまり上着がリネンとそのまま交換可能な形態という特徴的な性質を獲得したとしても、これではまだこの両者を交換すべき比率はまったく出てこない。リネンの価値は決まった量なので、この比率は上着の価値の規模による。上着が等価物として表現され、リネンが相対価値として表現されるか、それともその逆にリネンが等価物で上着が相対価値として表現されるか、いずれにしても上着の価値の大きさはいつも変わらず、それを作るのに必要な労働時間で決まるモノであって、その価値形態とは関係ない。でも上着が価値表現の中で等価物の位置を占めるようになったとたん、その価値の規模は定量的には表現されなくなる。それどころか上着はいまや価値の等式の中で、あるただのモノの絶対量としてのみ存在するようになる

たとえばリネン 40 ヤードが「持つ価値」は なんだろう？ 上着 2 着だ。上着という商品がここでは等価物の役割を果たすので、上着という利用価値が、リネンに対する価値を体現したものとなるので、上着の絶対数でリネンの中にある価値の絶対量を十分に表現できるのだ。つまり上着 2 着はリネン 40 ヤードの価値の大きさを表現できるけれど、それ自身の価値の大きさは決して表現できない。ベイリーやその先人たちおよび後継者たちの多くは、この事実についてきちんと理解できていなかったために、つまり価値の等式の中で等価物が常にあるモノ、ある利用価値の単純な量という形態を取ると考えたために、価値の表現を単なる定量関係として見るというまちがいに入り込んでしまった。でも実は、商品の等価物形態は、価値の定量的な決定要因をまったく含んでいない*11。

等価形態について考えてみたとき、真っ先に気がつく奇妙な点は、利用価値がそれと反対のものである価値の出現形態となることだ。

商品の自然形態がその価値形態となる。でも、よく気をつけてほしいのだけれど、この

*10 訳注：うだうだ書いてるけど、数式で表現すれば一発ですむつまんない話なんですけど。

*11 訳注：それを作るのに必要な労働の量ですべて決まるんでしょ？ 上着の中に一定量の労働があると見なしているからこそ等式で結んだりしたんでしょ？ だったら含んでるじゃないの。

代替が商品 B (上着、トウモロコシ、鉄等々) で起こるのは、他の商品 A (リネンなど) がそれと価値関係に入るときだけだ。そしてその代替は、この関係の制約内でしか起こらない。ある商品は、自分自身とは等価物として関係づけられない。だから、それ自身の物理的な形をそれ自身の価値の表現として使えないので、等価物として別の商品と関連づけられなくてはならない。だから、別の商品の物理形態を、自分自身の物理形態に仕立てなくてはならないわけだ。

これをはっきりさせるために、物質的なモノとしての商品、つまり利用価値としての商品に適用される尺度を例にとろう。砂糖のかたまりは、物体なので重たく、だから重量を持つ。でもその重量そのものを見たりさわったりはできない。そこで、事前に重さがわかっているいろんな鉄のかたまりを持って来るわけだ。鉄のモノとしての形態は、それ自身として見れば、砂糖のかたまりと同じく重さの表現形態じゃない。でも、砂糖のかたまりを重さとして表現するためには、それを鉄との重さ関係の中に置く。この関係の中で、鉄は重さだけを表現するモノとして扱われる。だから鉄の量は、砂糖の重さを量るために機能し、砂糖のかたまりとの関係の中では、純粋な重さの形態、重量の表現形態となる。鉄がこの役割を演じるのは、この関係の中だけのことだ。つまり、砂糖との、または他の重さを知りたい各種のモノとが、鉄と取り結ぶ関係の中だけでその役割が出てくる。もしどっちのモノものも重さがなければ、それはこの関係を結ぶことができないし、だから片方がもう片方の重さを表現するという機能を果たせない。それぞれをはかりに載せれば、重量として見た場合にそれらが同じモノで、だから適切な量だけ取れば、両者が同じ重さを持つてということが実際にわかる。ちょうど鉄というモノが、砂糖のかたまりとの関係の中で、重量の尺度としては重量だけを表現しているように、われわれの価値の式のなかで、上着というモノは価値だけを表現している。

でもアナロジーはここで終わる。砂糖のかたまりの重さを表現するとき、鉄はその重量という両方のモノに共通する自然の性質を表している。でもリネンの価値の表現の場合には、上着は超自然的な性質をあらわしている。つまり、それらの価値だ。そしてその価値は、純粋に社会的なものだ。

商品、たとえばリネンの相対的な価値形態は、その価値存在を、その材質や性質とはまったくちがったものとして表現する。たとえば上着と比べられるという性質として表現するわけだ。だからこの表現自体が、それが社会的関係を隠しているんだよ、ということを示していることになる。等価形態の場合には、その逆が成り立つ。まさに物質としての商品自体、たとえば上着が、日常生活の中で同じように価値を表現し、したがって価値形態を自然そのものによって与えられているということから成り立つのが等価形態だ。確かに、これは価値関係の中でだけ成立するものだ。つまり、リネンという商品が上着とい

う商品と等価物として関係している場合にしか成立しない。でも、モノの性質は他のものとの関係から生じるものじゃない。逆にそれは、そういう関係によって活性化されるだけだ。だから上着は、その価値形態（つまりその直接交換可能だという性質）を自然から与えられたように見える。ちょうど、重さを持つ性質や、われわれを暖かく保つ性質が自然から与えられているように。そこで出てくるのが、等価形態の謎めいたところが出てくる。これが経済学者の粗雑なブルジョワ的見方に衝突するのは、その等価形態がその完全に発達した形、つまりお金という形で経済学者に直面するときだけだ。そうなるとその経済学者は、黄金や銀の神秘的な性質をなんとかごまかして説明しようと、それをもっと魅力のない商品と置き換えて、ずいぶんさっぱりした顔で満足げに、これまで等価物の役割を歴史上のどこかで果たしてきた、劣った商品のカタログをあれこれ並べ立てはじめるのだ。経済学者は、リネン 20 ヤード = 上着 1 着 という実に簡単な価値の表現にさえ、解明すべき等価形態の謎が示されているということに気がつきさえしない。

等価物として機能する商品の実体は、常に抽象的な人間労働の体現としてあらわれ、そしてそれは必ず何かはっきりした形で役に立つ具体的な労働の産物だ。上着が単に抽象的な人間労働の具現化したものなら、その上着の中に実際に表れた仕立て作業は、単に抽象的な人間労働の形で実現しているだけだ。リネンの価値の表現の中で、上着の仕立て作業の有用性は、服や、結果的にまた人を作ることにあるのではなく、われわれがすぐに価値として（つまり凝集された労働の量として）認識する物理的実体を作る、ということにある。^{*12}そしてそこでの労働は、リネンの価値の中で対象化されている労働とまったく区別がつかないものだ。こういう価値の鏡として機能するためには、仕立て作業は人間の労働だという抽象的な性質以外に何も反映しちゃいけない。

人間の労働力は、仕立て作業という形でも使われるし、布織り作業という形でも使われる。だからどっちも、人間の労働だという一般的な性質を持っていて、だからたとえば価

^{*12} 訳注：説明しよう！ マルクスがここで何を得体の知れないことを延々と述べているかという、要するに交換価値（お値段ですな）と実用的な価値（そのお役だち度合いですな）とは関係ないと言った一方で、実は関係ある、というのを言うためにへりくつをこねているのだ。リネンと上着という、布製品を例にあげるからなんかもっともらしいけど、本とフライパン、というもので話そうか。本のお値段ってのは、マルクスによれば、それを作る労働時間で決まる。ところが一方でマルクスは、値段は直接ははかれない、という。で、値段が表現されるのは、何か別のものと交換されるときだ、という。そしてその本のお値段（有用性とは関係なし）は、交換される対象のフライパンで表されるけれど、そのときはフライパンのお値段（つまりそれを作るのに使われる労働）は関係なくて、フライパンの実用的価値（が効いてくるんだ、という。つまり本とフライパンを交換するとき、本を手放す側は「この本につきこまれた労働量は、このフライパンの目玉焼き等製造能力と同じだ」という変な判断をする、というのがマルクスの主張。ところがその次に、（ちょうどこの注のついている文のあたり）実はそのものの有用性が問題になってるんじゃない、人はそのフライパンの中に凝集された労働量を一瞬で見て取るんだ、という話をしはじめる。要するに、価値は労働時間でもそれは直接は見えないから、交換するとき別のものの中の実体（有用性）の中で表現されるでも人は実はその別のものの中にある労働量を見ているでもその労働量は実は見えないから……という無限ループになってるわけだ。

値の生産といった場合には、この観点から検討されなきゃいけない。これには何も謎めいたところはない。でも商品の価値表現では、この質問がひっくり返る。たとえば、布織り作業が価値を作るのは、それが布を織るという具体的な形態によるんじゃないで、人間の労働だという一般的な性質からくるのだという事実を表すために、われわれはそれを、リネンと等価なものを生み出す具体的な作業、つまり仕立て作業と対比させる。仕立て作業は今や、抽象的な人間労働を具現化する、実体的な形態だと見なされる^{*13}。

だから等価形態は、第二の特異性をもっている。等価形態の中では、具体的な労働は、その正反対である抽象的な人間労働の表現形態になる、ということだ。

でもこの仕立て作業という具体的な労働が、他と何のちがいもない人間労働の表現としてのみ捕らえられるから、それは他の種類の労働、たとえばリネンにこめられた労働と同じモノになるという特徴を持っている。結果として、他のあらゆる商品生産労働と同じくそれは個別個人の労働だけれど、でも一方でそれは直接的に社会的な形での労働でもある。まさにこの理由から、それは他の商品と直接交換可能な製品という形でわれわれの前に提示されるわけだ。だから等価形態には第三の特異性がある。私的な労働が、その正反対の形態をとる、つまり直接的に社会的な形の労働となる。

いま展開してきた等価形態の二つの特異性は、社会的・自然的を含め、数多くの思考の形と同じく、価値形態をも最初に分析した偉大なる探求者に遡るともっとはっきりしてくる。その探求者とはアリストテレスだ。

まずかれは、商品の金銭形態が価値の単純な形態、つまりある商品の価値表現を、任意に選んだ何か他の商品で行うという側面をもっと発展させただけのものだ、ということをとてはっきりと述べている。というのもかれはこう述べている：

ベッド5つ = 家1軒

というのは

ベッド5つ = ある量のお金

というのと何のちがいもない、と。

そしてかれはさらに、この価値そのものの表現の枠組み自体が、家が定性的にベッドと同じと見なされることを必要とするんだ、と看破している。そしてこうしたものが、感覚的には別個のものだから、この本質的な同一性がなければ通約可能な量として相互に比べたりできないということも見て取っている。かれは言う。「等価性なくして交換はありえず、通約可能性なくして等価性はあり得ない」。でもここでアリストテレスは息切れして、価値形態をそれ以上分析するのを放棄する。「しかし現実には、こんな似たところのない

^{*13} 訳注：上の段落で言ったことから一步後退したことに注意。

もの同士が通約できる（つまり定性的に等しい）ということは不可能だ。この種の等価性は、物事の真の性質とは絶対に異質なものであり、したがってそれは「現実的な目的のための便宜上の措置」でしかない。」

つまりアリストテレスは自分で、それ以上の分析がなぜできなかったかを告げてくれている。価値の概念が欠けていたからだ。ベッドから見て、そのベッドの価値をあらわすものとしての家が表象している均一な要素、つまり共通の中身はなんだろう？ そんなものは、本当は存在し得ないのだ、とアリストテレスは言う。でも、そんなことはないだろう。ベッドに対して、家は何か等しいものをあらわす。それがベッドと家の両方の中にあって本当に同じものを表している限り。そしてそれは 人間の労働だ。

でも当のアリストテレスは、価値の形態を観察してもこの事実を抽出できなかった。商品価値の形態ではすべての労働が同じ人間労働として表現されているということ、つまり同じ品質を持つ労働で表現されていることがわからなかったのだ。なぜかという、ギリシャ社会は奴隷労働に基盤をおいていたからで、だから人やその労働力が不平等だということを当然の偏見として持っていたからだ^{*14}。価値の表現の秘密、つまりあらゆる種類の労働の平等性と等価性（なぜかという、それは一般化された人間労働だからだ。そしてこれが当てはまるのはその限りにおいてのことだ）は、人間の平等性という概念が固定した一般的な意見としてすでに永続的になったときにしか解明できないものだからだ^{*15}。でもこれは、商品形態が労働の産物のユニバーサルな形態になった社会、つまりは支配的な社会関係が、商品の所有者としての人間同士の関係しかないものだからだ。アリストテレスの天才性は、まさに商品の価値表現における等価関係の発見に示されている。この等価性の関係が「実際には」何で構成されていたのかをかれがつきとめられなかったのは、かれが暮らしていた社会に内在する歴史的制約のためでしかない。

(iv) 総体として考えた単純な価値形態

商品の単純な価値形態は、別種の商品との価値関係、つまりはそれとの交換関係に含まれている。商品 A の価値は、定性的には商品 A と商品 B とが直接交換できることで表されている。これは定量的には、一定量の商品 A と、ある決まった量の商品 B とが交換できるということで表現されている。言い換えると、商品の価値はその「交換価値」としての提示を通じて個別に表現されている。本章のはじめに、われわれはさりげなく商品が利用価値でもあり交換価値でもあると述べたけれど、これは厳密に言うともちがっている。

^{*14} 訳注：ここでマルクスはギリシャ社会を不平等社会だと糾弾している。でも、すべてを均質な労働としてみる、というのがどういうことだったか思い出そう。いろいろちがった不平等な労働があるけれど、それを平均的な労働に換算してみよう、というのが「同じ品質を持つ労働」だったわけだ。自分の社会については勝手に平等なものに換算することにしている、他の社会を見るときには、そこにでこぼこがあるといって糾弾している。イーンチキ！

^{*15} 訳注：あほくさ。人類平等だとみんなが思ったら、人類の労働も平等だと思う、と言ってるトートロジー。

商品は利用価値あるいは役にたつ物体であり、同時に「価値」である。その商品は、その価値が自然形態とはまったく別の独自の表現形態を持ったとたんに、その正体である二重の姿をすぐにはあらわす。その表現形態というのは交換価値だ。商品はそれだけ見ている時には絶対にこの形態を持たないけれど、でもそれが別種の他の商品と価値関係または交換関係にあるときにだけそれが姿をあらわす。いったんこれがわかれば、われわれの最初の言い方も何ら害はない。むしろ手短な言い方として役に立つ。

われわれの分析は、価値の形態、つまり商品の価値の表現は、その商品価値の性質から出てくるものであり、価値とその大きさが交換価値の表現方法から生じてくるのとはちがう、ということを示した。この第二の見方は、重商主義者たち（およびフェリエ、ガニルなど重商主義を現代風に焼き直した人々）やその対極にいるバステアやお仲間たちのような、現代の自由貿易の旗振り役たちの両方にとって、がっかりするものだろう。重商主義者は価値表現の定性的な部分に主な焦点をあてる。これはつまり商品の等価形態ということで、これはその完成形ではお金だ。一方、現代の自由貿易押し売り屋さんたちは、こうした商品をどんな値段でもいいから叩き売らねばならないので、価値の相対形態の定量的な面を強調する。つまりかれらにとって、価値や価値の大きさは、交換関係という手段を通じた表現以外のどこにも存在しない。つまりそれは、証券取引所での日々の時価一覧の中にしか価値がない、と言っているわけだ。スコットランド人のマクラウドは、ロンドンバード街の混乱した考え方を実に博識な洗練度でもって排除したけれど、かれは迷信深い重商主義者と啓蒙された自由貿易押し売りさんたちとの見事なあいのこだ。